

「一粒の麦」

ヨハネによる福音書 一二章二〇―三六節

南山教会 二〇二四年三月一七日

村山盛芳

ドストエフスキーの最後の未完の大作、『カラマーゾフの兄弟たち』、その見返しには「ひと粒の麦、もし地に落ちて死なずば、ただひとつにてあらん、死なば多くの実を結ぶべし」という今日の聖書の個所の、有名な聖句が記されている。これによつて、この小説がどのよう展開するかが、おぼろげながら見えて来ます。主人公は、おそらく「一粒の麦」として生き、そして死んでゆくことになるのだらう、と。さらにこの小説家は、この物語を通して、実は、神、そしてイエス・キリストについて語りたいのだらうな、

今日の聖書箇所は、ヨハネによる福音書のイエスの受難予告の部分です。ギリシヤ人、異邦人、外国人が、イエスの弟子たちのところにやってきて、イエスへの面会を取り次いでくれるように頼みます。弟子たちは、それを受けて師匠にそれを伝えると、イエスはこう言われます、「人の子が栄光を受ける時が来た・・・」。話が噛み合っていないことに気づきます。面会に来た外国人に、唐突に、十字架の苦しみが告げられるのです。これでは会いに来た人は面食らったことでしょう。自分たちは何かとんでもなく悪いことをしたのだらうか、と。おそらくヨハネの教会には、たくさんのギリシヤ人が集っていたのでしよう。そこでユダヤ人でなく、異邦人の救いの問題が盛んに議論されたのだらうと思われれます。ユダヤ人と異邦人、この両者の間に、「救い」の区別や差別はないのか。ユダヤ人であろうと異邦人であ

ろうと、等しく人間、皆、罪人、神のみまえに差別のあるはずはないのです。

だから二六節のみ言葉の最後「わたしに仕える者がいれば（誰であろうと）、父はその人を大切に（愛して）くださる」。これを言いたいのでしょう。神は、求めて来るもの、イエスに従う者を、愛を持って受け止めて下さるのです。それは、その人が好人であるからとか、善行を積んでいるからとか、精進しているから、とかいう人間的な理由からではありません。ひとえに神の独り子、主イエスの十字架のみ苦しみがあるからです。ただ十字架によって、人間の血筋や、出自、どの国出身か、身分によらず、また信仰や行いによらず、神の救いはもたらされるのです。それが神の栄光の表われそのものです。

こうした救いの議論の間に、あの有名なみ言葉が挟まれているのです。二四節「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが死ねば、多くの実を結ぶ」。イエスの十字架は、「二粒の麦」の死だ、というのです。ヨハネは、他の福音書で記している「種まきの譬え話」をちゃんと知っています。農夫が種を蒔く、種は色々の地に落ちる。良くない地に落ちた種は、実を結ばないが、良い地に落ちた種は、三〇倍、六〇倍、一〇〇倍にもなつた」。ところがヨハネは、その有名な譬えをそのまま再録することなく、一歩進んで、より細かな目を持って、収穫の「現実」をあらわにしています。悪い地に落ちて実を結ばなくても、あるいは良い地に落ちて、多くの実を結んだとしても、そこには一粒の麦の「死」、という厳粛な事実がある。「死」なしに、収穫も生命も、何事も生起しないのです。

全て生命あるものは、いつか終わりを迎えます。他の生命の犠牲の上に、多くの生命は支えられています。やたらに生命を粗末にしてはならない根拠です。ところがこの生命の厳粛な実相を「多数のためには、いくらかの犠牲は仕方ない」という多数派の尻尾切りの論理に

すりかえる向きがあります。ヨハネによる福音書では、大祭司カイアファの口にこの論理を語らせています。一八章一四節「ひとりの人間が民の代わりに死ぬ方が好都合だ」、このようにヨハネによる福音書には、まっすぐに事柄に向かおうとする姿勢があります。

「一粒の麦」とは、主イエスの十字架に向かう歩みの譬えですが、ただイエスひとりのこととして語ろうとしているのではないことに注意しましょう。「わたしに仕えようとするものは、わたしに従いなさい」と言われているように、イエスの後について行く人もまた、「一粒の麦」としての生き方を辿ることになる、とヨハネは言うのです。「臆病者の私には、十字架なぞ、滅相ありません」と言われるかもしれませんが。しかし、どの人も、誰のものとも比べられない十字架を知らずに背負っているのです。時にその重さに悲鳴を上げ、時にころびながら、負わざるを得ないものを、仕方なく担っているのです。それでも何とか担おうとするのは、先に行くイエスの後ろ姿が見えるからです。何度も転びながら、倒れ伏しながら、歩んで行かれるのです。それを見上げると、私も、私の歩みで、私の足取りで、歩むことが出来る。それが「一粒の麦」の姿です。

聖路加国際病院で労された医師、故日野原重明ドクターは、一九七〇年赤軍派が起こした「よど号」ハイジャック事件に遭遇されました。若い過激派のメンバーが飛行機を乗っ取り、爆発物を体に巻き、日本刀を手にしていたそうです。乗っ取り犯は、朝鮮海峡上を飛んでいるとき、乗客へのサービスのつもりだったのだろうか、「機内に持ち込んでいる赤軍機関誌と、その他の本の名を放送するから、何を読みたいか手を挙げよ」と言って金日成や親鸞の伝記、伊東静雄の詩集、次いでドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』などを挙げたそうです。日野原氏一人だけが、『カラマーゾフの兄弟』を借りたいと手を挙げたら、文庫本

を膝に置いてくれた。本を開くと聖書の言葉が目飛び込んできた。「一粒の麦もし地に落ちて死なずば、ただ一つにてあらん、死なば多くの実を結ぶべし」「もしかしたら私は死ぬかもしれないが、その死は何かの意味を持つのではないか」、このみ言葉を目にすると、「気持ち少し楽になった」と回顧しておられたといひます。

「だが、死ねば、多くの実を結ぶ」、どんな実が結ばれるかは、ずっと後のお楽しみです。ただ神のみ前で、それが明らかにされるのです。「父はその人を大切にしてくださる」。「大切にする」とは、いろいろ面倒を見る、手入れをする。肥料を与え、水をまき育てるということです。それはその「一粒」を、深く心にかけていくくださるからです。「大切にする」とは「愛する」のまさしく言い換えなのです。一粒の麦の死もまた、神のみ手の内にあります。だから私たちは、安心して生きて、そして死ぬことができるのです。